

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和7年4月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万6474トン、前年同月比96.6%、価格は1キログラム当たり307円、同95.8%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5511トン、前年同月比99.7%、価格は1キログラム当たり281円、同97.9%となった。
- 全般的な出回り不足から、平年より高めの価格展開が見通される一方、市場では入荷急増により価格高から安値へとといった展開が早まることも予想される。

(1) 気象概況

上旬は、旬平均気温は期間前半が沖縄・奄美を中心に寒気の影響を受けやすく、沖縄・奄美でかなり低かった。また、期間後半は北日本を中心に暖かい空気が流れ込みやすかったため、北日本で高かった。旬降水量は北・東日本日本海側で少なかった。東日本太平洋側では1～3日頃にかけて南岸低気圧の影響を受けたため多かった。沖縄・奄美は1日と10日頃に低気圧や前線の影響を受けたため多かった。一方、西日本は高気圧に覆われ晴れた日が多かったため少なかった。旬間日照時間は北日本日本海側でかなり少なく、北・東日本太平洋側と東日本日本海側で少なかった。

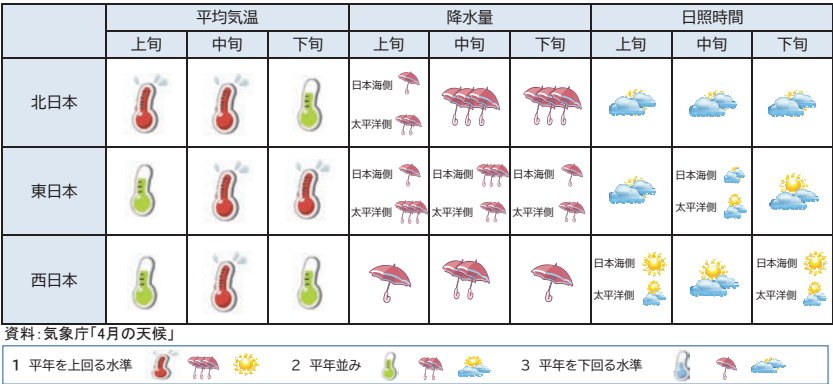
中旬は、13日から16日頃に低気圧が北日本付近をゆっくり通過し、北日本を中心に曇りや雨の日が多く、北海道地方では4月として記録的な大雨となった所があった。旬平均気温は、17日から20日頃に南高北低の気圧配置となり暖かい

空気が流れ込み、北・東日本でかなり高く、西日本で高かった。旬降水量は、北日本でかなり多く、東日本日本海側で多かった。北日本日本海側では平年比278%と1946年の統計開始以降で4月中旬として1位の多雨となった。旬間日照時間は、北日本太平洋側でかなり少なく、北・東日本日本海側で少なかった。一方、沖縄・奄美は高気圧に覆われやすく、かなり多かった。

下旬は、旬平均気温は、旬の前半中心に本州付近に暖かい空気が流れ込みやすかったことから東日本では高かった。旬降水量は、この時期に北日本付近を通過した低気圧の影響により、北日本では多く、東日本日本海側と西日本では少なかった。旬間日照時間は北日本で少なかった。一方、東日本以西では高気圧に覆われた日が多かったため、西日本日本海側と沖縄・奄美で多かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況



(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、
入荷量は10万6474トン、前年同月比96.6%、

価格は1キログラム当たり307円、同95.8%
となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(4月速報)

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	106,474	96.6	89.3	307	95.8	113.7	305	311	306
だいこん	8,133	101.3	89.2	116	87.1	115.3	120	113	114
にんじん	6,547	103.0	85.6	285	104.3	162.8	292	301	268
はくさい	5,449	102.5	92.1	97	86.2	96.0	123	94	75
キャベツ類	16,242	100.6	89.7	117	79.7	104.9	123	116	111
ほうれんそう	1,400	91.6	103.4	475	94.6	95.8	469	528	436
ねぎ	3,031	86.6	85.9	436	125.0	126.4	464	439	409
レタス類	6,601	106.9	102.8	175	63.5	89.3	188	189	151
きゅうり	5,941	97.0	88.5	313	81.6	103.5	342	321	288
なす	2,602	119.8	104.2	387	82.1	92.6	419	384	366
トマト	5,843	96.5	90.8	399	92.1	102.7	410	404	385
ピーマン	2,422	100.4	98.7	619	85.8	106.0	626	633	601
さといも	226	89.8	70.5	356	95.5	119.8	360	357	351
ばれいしょ	5,540	70.8	70.7	320	178.7	149.1	263	320	377
たまねぎ	9,610	88.8	79.4	162	114.2	133.0	151	155	178

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注1：平年比は過去5カ年平均との比較。
注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、下旬にやや落
ち着いたものの堅調な価格が続き、大幅な高値
で推移した前年をやや上回り、平年を6割以上
上回った(図2)。
葉茎菜類は、レタスの価格が、下旬に向けて
落ち着きを見せ、高値で推移した前年を4割近
く下回り、平年を1割強下回った(図3)。
果菜類は、きゅうりの価格が、入荷量が回復

した下旬に向けて落ち着きを見せ、大幅に高値
で推移した前年を2割近く下回り、平年をやや
上回った(図4)。
土物類は、ばれいしょの価格が、高値傾向か
らさらに中旬以降上がり、安値で推移した前年
を8割近く上回り、平年を5割近く上回った(図
5)。
なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

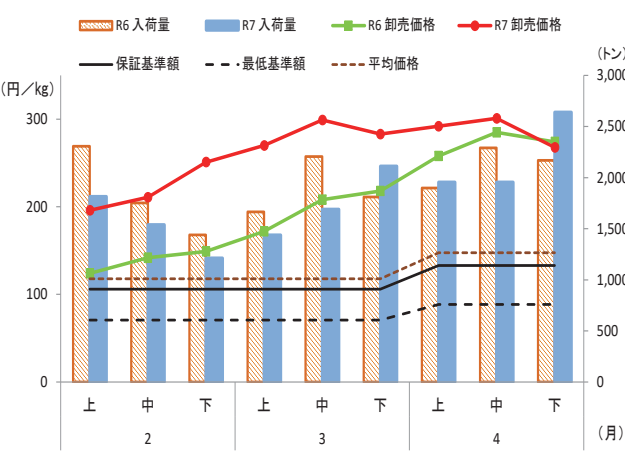


図3 レタスの入荷量と卸売価格の推移

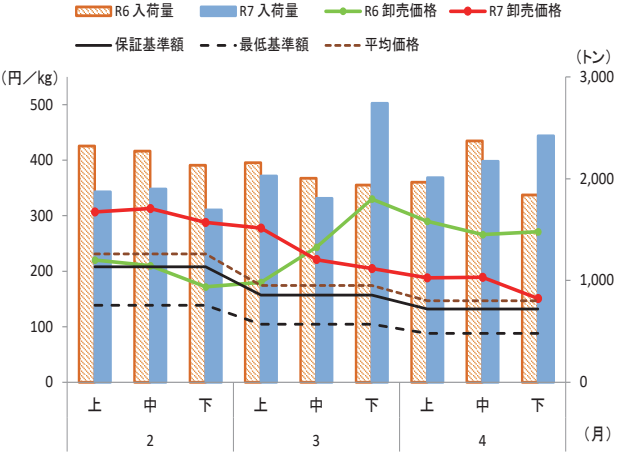


図4 きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

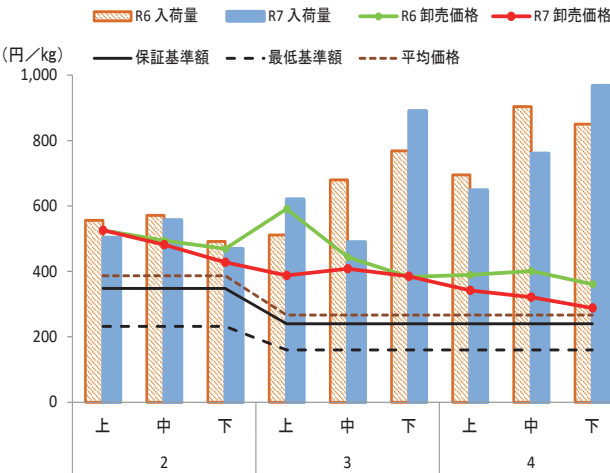
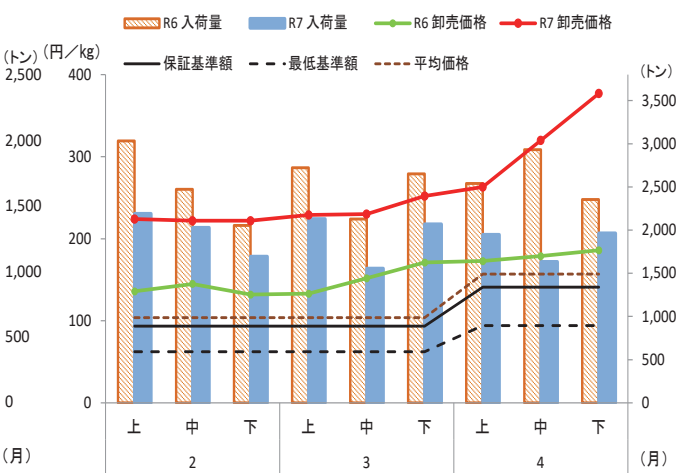


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	4月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	千葉産中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、 ^{はしき} 播種期の降水量が少なかったことから生育が遅れていたが、3月の気温の上昇と適度な降雨によりおおむね前年並みまで回復した。病虫害の発生も抑えられている。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年を1割強下回った。 価格は安定した展開となり、高値で推移した前年を1割以上下回り、平年を1割以上上回った。
	にんじん	徳島産中心の入荷となった。徳島産の作付面積は前年並みで、2月下旬までの低温の影響で遅延していた生育は、3月に入り気温が上昇したため、回復し、順調である。病害虫の発生は少ない。輸入の中国産は前年を2割近く下回った。総入荷量は、少なかった前年をやや上回り、平年を1割以上下回った。 価格は下旬にやや落ち着いたものの堅調で、大幅な高値で推移した前年をやや上回り、平年を6割以上上回った。
葉茎菜類	はくさい	茨城産の、春作中心の入荷であった。茨城産の作付面積は前年並みで、3月の天候に恵まれて、生育はおおむね順調である。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、中旬以降落ち着きを見せ、高値で推移した前年を1割以上下回り、平年をやや下回った。
	キャベツ類	神奈川県産を中心に愛知産、千葉産などの入荷があった。神奈川県産の作付面積は前年並みで、アブラムシの発生がやや多いが病害の発生は少なく、干ばつ傾向の影響により生育にばらつきは見られるものの、3月の適度な降雨と気温の上昇により回復した。愛知産の作付面積は前年並みで、3月の天候に恵まれ、生育はおおむね順調である。千葉産の作付面積は前年並みで、定植の遅れは回復傾向にはあるが、全体的に生育は遅延気味である。病虫害の発生が散見されており、品質にばらつきが見られた。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年を1割強下回った。絶対数不足は解消されつつあるが、引き続き輸入が目立つ。 価格は下旬に向けて徐々に落ち着きを見せ、高値で推移した前年を2割強下回り、平年をやや上回った。
	ほうれんそう	群馬産、茨城産中心の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、平坦地のハウス物、高冷地のトンネル物が中心である。適度な降雨と気温の上昇に伴い生育は回復するも一部で虫害が散見され、品質低下がみられる。茨城産の作付面積は前年並みで、ハウス物中心にやや遅延していた生育は適度な日照と降雨、気温の上昇に伴い回復傾向にあるものの、気温の乱高下で品質低下が散見される。総入荷量は多かった前年を1割近く下回り、平年をやや上回った。 価格は棚持ちの懸念が大きくなったことや、他品目の価格の下落などにより、下旬に向けて特売の ^{ていりやう} 値上 ^{あがり} に上がりづらくなり、前年、平年ともにやや下回った。

	ねぎ 	千葉産中心に茨城産、埼玉産などの春ねぎ～初夏ねぎの入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、3月の気温上昇と適度な降雨により、低温・乾燥でそれまで遅延していた生育は回復し、おおむね前年並みとなっている。茨城産の作付面積は前年をやや上回り、低温・乾燥の影響による生育停滞からは回復傾向となっている。埼玉産の作付面積は前年をやや下回り、乾燥の影響による遅延が懸念されたが、気温の上昇と降雨により回復しておおむね順調である。総入荷量は前年、平年ともに1割以上下回った。 価格は、低温・干ばつの影響から下旬に向けてやや落ち着いたものの堅調で、前年、平年ともに2割以上上回った。
	レタス類 	茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、低温・乾燥による生育停滞から3月の気温の上昇と適度な降雨により回復し、おおむね順調である。総入荷量はやや少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、下旬に向けて落ち着きを見せ、高値で推移した前年を4割近く下回り、平年を1割強下回った。
果菜類	きゅうり 	群馬産、埼玉産、宮崎産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、一部乾燥による病虫害が散見されるが、天候に恵まれ生育はおおむね順調である。埼玉産の作付面積は前年並みで、無加温物については低温の影響により生育に若干の遅れが見られるが、加温物については順調である。宮崎産の作付面積は前年をやや下回り、一部低温と曇雨天の影響で樹勢の低下や病虫害が散見される。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割強下回った。 価格は入荷量が回復した下旬に向けて落ち着きを見せ、大幅に高値で推移した前年を2割近く下回り、平年をやや上回った。
	なす 	高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、3月中旬以降の出荷増により、成り疲れによる樹勢の低下がやや見られる。コナジラミやヨトウ類、すすかび病、うどん粉病などの病虫害が散見されている。総入荷量は少なかった前年を2割弱上回り、平年をやや上回った。 価格は安定した入荷から中旬以降落ち着きを見せ、高値で推移した前年を2割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。
	トマト 	熊本産、栃木産を中心に愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、日照不足の影響により着色不良が散見され、やや小玉傾向であったが、その後は天候に恵まれ回復した。病害が散見される。栃木産の作付面積は前年並みで、促成長期採り作型の生育は果実負担により樹勢がやや弱く、肥大不足の傾向にある。また病虫害が散見される。促成作はおおむね順調で肥大も良好であった。愛知産の作付面積は前年並みで、若干小玉傾向であったが回復傾向である。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割近く下回った。 価格は下旬にやや落ち着いたものの、月間を通して安定した動きとなり、高値で推移した前年を約1割弱下回り、平年をわずかに上回った。
	ピーマン 	茨城産を中心に宮崎産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、1月以降の天候に恵まれおおむね順調であった。病害は少ないが、一部で虫害が散見された。宮崎産の作付面積は前年をやや下回り、低温の影響により生育にばらつきが見られ、病虫害が一部で散見される。総入荷量は前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。 価格は月間を通して堅調な動きとなり、高値で推移した前年を1割以上下回り、平年をかなりの程度上回った。
土物類	さといも 	埼玉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、生育は良好で収穫は終了しているが、残量は前年より少ない。輸入の中国産については前年を2割近く下回った。総入荷量は少なかった前年を1割強下回り、平年を3割弱下回った。 価格は残量が少なく堅調な推移となり、高値で推移した前年をやや下回り、平年を2割弱上回った。
	ばれいしょ 	鹿児島産を中心に北海道産の入荷があった。鹿児島産の作付面積は前年を下回り、霜害やヒヨドリの食害により生育が遅延し、低温の影響もあり小玉傾向である。北海道産の作付面積は前年並みで収穫を終了した。残量は少なく発芽が懸念される。長崎産についても低温・乾燥に加え、場所によっては霜害の影響があった。総入荷量は前年、平年ともに3割弱下回った。 価格は、高値傾向からさらに中旬以降上がり、安値で推移した前年を8割近く上回り、平年を5割近く上回った。
	たまねぎ 	北海道産を中心に佐賀産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで収穫を終了した。作柄はあまり良くなく残量は少ない。佐賀産の作付面積は前年並みで、定植後の低温の影響による活着不良などにより生育が遅延した。早生物以降は、降雨や気温の上昇により回復傾向するも、極早生物は肥大が良くない。輸入の中国産は前年を1割近く下回った。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、前年を2割強下回った。 価格は月間を通して堅調な動きとなり、高値で推移した前年を1割以上上回り、平年を3割以上上回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、
入荷量は3万5511トン、前年同月比99.7%、

価格は1キログラム当たり281円、同97.9%
となった(表3)。
品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(4月速報)

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	35,511	99.7	93.9	281	97.9	114.4	278	283	284
だいこん	1,918	91.7	77.5	112	91.2	126.7	123	115	96
にんじん	2,667	104.9	99.9	272	100.4	162.1	289	298	238
はくさい	3,097	105.0	101.3	87	73.3	92.3	97	92	75
キャベツ類	4,733	108.3	99.5	102	74.4	102.2	110	101	94
ほうれんそう	451	106.5	103.5	486	84.5	91.2	421	535	501
ねぎ	715	104.5	101.0	463	101.8	116.2	491	458	440
レタス類	1,362	112.9	100.5	151	52.8	76.5	152	161	142
きゅうり	1,341	103.8	90.7	285	75.3	96.9	306	291	265
なす	1,005	111.5	114.9	370	85.6	94.8	388	368	360
トマト	1,765	107.0	103.0	383	89.6	100.9	396	388	368
ピーマン	689	135.5	135.8	565	78.3	100.6	578	589	535
さといも	37	88.1	68.3	441	106.9	138.8	440	451	435
ばれいしょ	2,997	87.2	86.1	316	174.8	141.5	259	325	375
たまねぎ	4,806	90.3	88.5	152	114.1	131.2	143	144	168

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	4月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	香川産、長崎産、鹿児島産が主体となる入荷に、月の前半は徳島産の残量入荷などがあつた。鹿児島産は作柄不良で産地出荷量が少なく、全旬を通じて入荷量が少ない状況が続き、月間では前年の半分以下であった。他の産地は比較的順調な出荷となったが、月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 価格は、高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に上回った。
	 にんじん	徳島産を中心に、この時期の主力となる長崎産の入荷もあつた。徳島産は生育遅れから月の前半の産地出荷量は少ない状況であったが、後半に回復して増量し、月間では前年を上回った。長崎産は旬を追うごとに増量傾向も、全旬とも少なく、月間では前年を大幅に下回った。月間全体では前年をやや上回り、平年並みであった。 価格は、継続的に高値で推移した影響が残る中、上中旬は入荷量が伸び悩んだことから高値で推移し、下旬に少し下がったものの、月間では高値であった前年をわずかに上回り、平年を6割以上上回った。
葉茎菜類	 はくさい	上旬までは長崎産、中旬以降は茨城産が中心となる入荷であつた。茨城産は順調な出荷が続く旬を追うごとに入荷増量したものの、月間では前年を下回った。九州産地は作付け減が続いており産地出荷量は多くないが、上旬までは順調な入荷となり、長崎産の月間の入荷量は前年を大幅に上回った。月間全体では前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、高値疲れから下落し、気温上昇に伴い需要が減少したことに加え、加工業者が輸入の中国産へとシフトしたことで販売環境は厳しくなり、旬を追うごとに下落し、月間では前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。
	 キャベツ類	寒玉キャベツは愛知産が主体となり、春系は愛知産を中心に兵庫産、和歌山産、神奈川産などの入荷もあつた。各地とも日中の気温は上昇する一方で夜温が低く、生育は鈍化し産地出荷量は伸び悩んだ。愛知産の寒玉キャベツは終盤に向かい旬を追うごとに減量傾向であったが、春系は比較的順調な入荷が続いた。月間全体では、前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。 価格は、極端な高値続きだった反動から一転し、旬を追うごとに下落した。月間では、高値であった前年を大幅に下回り、平年をわずかに上回った。
	 ほうれんそう	徳島産が主体となり福岡産や岐阜産の入荷があつた。徳島産と福岡産は終盤で、旬を追うごとに入荷減となったが、残量は多く下旬まで順調な入荷が続いた。後続の夏秋産地である岐阜産が出遅れ、上中旬は入荷がなく、下旬も前年の半分程度に留まった。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。 価格は、前月までの野菜類全体の単価高の影響が残り、末端価格が高いままであったことから荷動きが鈍化したことにより下落し、安値推移となり、月間では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。

	ねぎ（白ねぎ） 	群馬産と鳥取産が主体となり、埼玉産などの入荷もあった。各地とも潤沢な出荷が続き、群馬産、埼玉産は残量も多く月の後半の入荷量も多い状況であった。全体では旬を追うごとに入荷増量となり、月間では前年をやや上回った。 価格は、前月までの野菜類全体の高値の影響が残る中で、入荷増量に伴い旬を追うごとにわずかに下落傾向であったものの、月間では前年をかなり上回った。
	ねぎ（青ねぎ） 	青ねぎは徳島産と高知産が主体となり、細ねぎは高知産と静岡産が主体となる入荷であった。前月までの単価高からの反動で価格が下がり、各産地の出荷意欲がそがれて入荷減量となった。業務用の引き合いも弱く、主力の徳島産の入荷量は全旬とも前年を大きく下回った。月間でも前年を大幅に下回った。 価格は前月までの高値の反動で急落し、月間では前年を大幅に下回った。
	レタス類 	玉レタスのラップ物は兵庫産が中心となる入荷で、茨城産や香川産などの入荷もあった。裸物は長崎産が中心となり、下旬には後続の長野産の入荷も始まった。各地とも生育良好で、潤沢な出荷が続いた。月間では、兵庫産が前年をかなり上回り、長崎産は前年を8割上回った。サニーレタスは福岡産が主体となり、下旬には後続の長野産の入荷も始まった。生育が良く潤沢な出荷が続き、全旬を通じて入荷量が多い状況が続き、月間では福岡産は前年の6割以上上回った。リーフレタスは福岡産を中心とし、下旬には後続の長野産の入荷も始まった。生育良く産地出荷量が多い状況が続いたが、加工業者からの発注が少なく積極的な入荷とならず、月間では前年を下回った。レタス類全体では、前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに上回った。 玉レタスの価格は、潤沢な入荷だったことから極端な高値だった前年を大幅に下回った。サニーレタスとリーフレタスも玉レタス同様、入荷量が多いことで価格が低迷し、単価高だった前年を大きく下回った。レタス類全体の価格は、前年を5割以上下回り、平年を2割以上下回った。
果菜類	きゅうり 	宮崎産が主体となり、高知産や徳島産の入荷があった。入荷が不安定で積極的な売り込みがかけられず、入荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。 特売なども少なく価格は低迷し、月間では前年を2割以上下回り、平年をやや下回った。
	なす 	千両系は高知産を中心として大阪産などの入荷があった。長茄子は福岡産を中心に熊本産の入荷があった。各地とも月の前半は日中の気温が上がらず、夜温も低かったため生育が進まずに産地出荷量は伸び悩んだが、後半は回復し入荷増量となった。月間全体では前年、平年ともにかなり大きく上回った。 入荷増量となったものの、大きな売り出しをかけられなかったため、価格は低迷を続け、月間では前年をかなり大きく下回り、平年をやや下回った。
	トマト 	熊本産と愛知産が主体となり、福岡産の入荷もあった。各地とも月の前半は日中の気温が上がらず夜温も低かったため、着色が進まずに上中旬は入荷量が少ない状況が続いた。下旬には回復傾向となったが入荷量は伸び悩んだ。月間全体では、前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。 価格は、競合するミニトマトの価格が低迷したことから、大玉トマトの価格もこれに引きずられ、旬を追うごとに下落した。月間では前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。
	ピーマン 	宮崎産と高知産が主体となり、順調な入荷が続いた。月間全体の入荷量は前年、平年ともに3割以上上回った。 価格は、単価高だった前年を2割以上下回り、平年をわずかに上回った。
土物類	さといも 	愛媛産が主体の入荷であったが、産地出荷量が少なく、入荷量は全旬を通じて少ない状況が続いた。国産の入荷量が少ない分、業務用向けを中心に輸入の中国産がこれをカバーする形となり、中国産の入荷量は前年を大幅に上回った。月間全体では、前年をかなり大きく下回り、平年を3割以上下回った。 価格は不足感から高騰し、国産は前年を大幅に上回った。全体でも高かった前年をかなりの程度上回り、平年を4割程度上回った。
	ばれいしょ 	丸芋は鹿児島産を主体とし、北海道産の残量入荷もあった。九州産地は、3月から4月の前半にかけて気温が上がらずに夜温も低かったため生育が進まず、出遅れて産地出荷量が少ない状況が続いた。月間の入荷量は、鹿児島産は前年の4割程度で、長崎産は4分の1に留まった。北海道産の切り上がりとともに中旬に端境が生じ、下旬の入荷量も伸びずに月間全体でも前年を大きく下回った。メークインは北海道産の切り上がりが早く、ほぼ鹿児島産のみの入荷となったが、九州産地の出遅れから産地出荷量が伸びず、入荷量は前年を大きく下回った。ばれいしょ全体では、前年、平年ともにかなり大きく下回った。 絶対量不足から価格は高騰し、月間では丸芋は前年の1.5倍以上となり、メークインは前年の2.5倍となった。全体でも前年を7割以上上回り、平年を4割以上上回った。
	たまねぎ 	中旬までは北海道産の残量入荷が主体となり、下旬には兵庫産の新物が主体となった。長崎産や佐賀産の入荷もあったが、生育遅れから出荷量が少なく長崎産の月間の入荷量は前年をかなり下回り、佐賀産は前年の2割以下に留まった。兵庫産は順調なスタートで全旬とも入荷量が多く、月間では前年を大幅に上回った。月間全体では主力の九州産の入荷量が少なかったことが影響し、前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、前月までの単価高の影響が残る中で九州産地の出遅れなどもあり高値で推移し、北海道産が切り上がる下旬に高騰した。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を3割以上上回った。

（執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹）

(4) 首都圏の需要を中心とした6月の見通し

3月から4月にかけて全国的に寒暖差が大きく、特に4月末は北海道の道東地方での積雪がニュースになった。関東では、菜種梅雨と呼ばれる連日の雨はなく、関東産のメロン・すいか類は潤沢な出回りが予想される。干ばつ気味だが、今後出荷が本格化する高冷地でのレタスは順調と予想される。昨今のコメの品薄などにより、東北の産地は、畑を水田に戻すためブロッコリーの作付けが減少するという情報もある。一般に「遅れる年は不作」とされるため、そのような年になることが予想される。いずれにしても、全般的な出回り不足から、平年より高めの価格展開が見通される一方、市場では入荷急増により価格高から安値へとといった展開が早まることも予想される。

根菜類



だいこんは、青森産は3月上旬から播種を開始したものの、春先の強風や降雨・降雪、雪解けの遅れなどが影響し、全般に遅れた。それでも例年並みに播種は終了したが、ベタ掛け物(保温資材を圃場に直接かける手法)の作付けが増え、トンネル物が減った。出荷開始は5月20日頃からはとなり、6月がピークと見込まれる。大分産は、業務用向けに周年出荷しているが、5月初旬の状況では思わぬ寒さにより生育が遅れている。5月の夜温が上がれば、一気に生育が進むと予想される。

にんじんは、千葉産の夏にんじんは5月下旬から出荷が始まり、6月にピークを迎えると見込まれる。作付けは前年並みで、品種は「紅うらら」^{あやほまれ}「彩誉」などである。青森産は、例年並みの6月20日頃から出荷を開始し、ピークは7月に入ってからと見込まれる。品種は「彩誉セブン」である。

葉茎菜類



キャベツは、群馬産は、例年並みの6月20日前後から出荷を開始し、当面のピークは8～9月と見込まれる。岩手産は、例年並みの6月

15日頃から出荷が始まり、出揃うのは7月上旬頃である。7月下旬から減少し9月中旬までは少なく、9月下旬になって再び増加すると見込まれる。作付けは前年比で微減である。長野産は、今年も前年同様6月28日から出荷を開始し、9月25日までと予想される。

はくさいは、長野産の標高1100メートルの産地からの出荷は、5月28日頃から始まると見込まれる。今年の天候は干ばつ傾向で推移したが、心配するほどの状況ではなく、10月まで一定のペースで出荷されると予想される。作付けは例年と同程度である。標高900メートルの産地は、5月15～20日頃から始まり、6月中旬まで多めの出荷となる。その後、再び8月中旬から10月まで増える見込みである。

ほうれんそうは、岩手産は気温が低めで、生育が緩やかとなっている。6月に出荷のピークとなり、7月には暑さから減少が予想される。作付けの減少は続いている。

群馬産は、露地物中心の出荷であるが、気温の低下で遅れている。5月の大型連休頃がピークとなり、中旬には終盤を迎える見込みである。6月下旬からは屋根掛け物となり、7月に本格的な増量が見込まれる。栃木産は5月末頃から出荷開始し、例年よりやや遅い展開となっている。まず標高800メートルの圃場^{ほしやう}から出荷され、標高800～1200メートルの圃場も始まる6月中下旬から7月中旬がピークとなり、8月はやや減る見込みである。出荷量は前年並みと予想される。

ねぎは、茨城産は3月の適度な降雨により前年より肥大が良好である。前年は3～4月に寒の戻りがあり肥大が悪かったが、今年の5月の初夏ねぎは前年を上回る出荷が予想される。5月中旬から出荷は本格化し6月も潤沢で、7月20日を過ぎると減少してくるが、平年並みの展開である。千葉産は、春ねぎが終わりかけており、夏ねぎが出始める時期を迎えている。生育は順調で、夏ねぎのピークは6月上中旬である。7月の出荷量は6月の半分程度まで減り、その後、9月が最も少なくピーク時の5%程度となると予想される。

レタスは、長野産は、準高冷地の産地の生育は順調で出荷が始まっている。寒暖差はレタスに好都合であり、干ばつ気味であるものの^{かんすい}灌水はできている。当面のピークは5月中旬から6月下旬までと見込まれるが、ほぼ平年並みである。高冷地の産地は5月15日頃から出荷を開始し、6月初め頃から増え一定のペースで8月まで続くと予想される。群馬産は7日程度の遅れとなっているが、生育そのものは順調である。4月末から一気に増え、5～6月がピークで、中でも6月が最も多く、7～8月も引き続き潤沢に出荷される見込みである。

果菜類



きゅうりは、埼玉産の促成きゅうりは4月下旬後半から5月の中旬にかけて出荷のピークとなり、6月いっぱい引き続き潤沢で、7月に終了するほぼ例年並みの展開が見込まれる。福島産は定植のピークを迎えているが、ハウス物の出荷も開始し、6月中旬にはハウス物が出揃い、6月下旬から7月にピークを迎える予想される。

なすは、高知産の4月の出荷は平年並みで、5月は成り疲れから立ち直りが遅れるものの中旬から再び増え、6月末頃には切り上がると予想される。群馬産のハウス物は6月にピークとなり、露地物も始まり併売される見込みである。朝晩は寒いが、基本的に天気が良く、生育は順調である。作付けは前年並みである。福岡産は4月の2週目からピークが続いているが、5月に入り減少が予想されるものの、5～6月は前年を上回ると予想される。東京市場への出荷は6月いっぱいであるが、7月中旬まで出荷できる生産者もいる。

トマトは、山形産は、定植時期の低温が影響し、例年より若干遅めの5月25日頃から出荷を開始する見込みである。6月第2週目に1回目のピークを迎え、2回目のピークは7月上旬と予想される。作付けは若干減少しており、品種は「りんか」や、桃太郎系である。青森産は、定植は問題なく順調に行われ、6月20日頃か

ら出荷開始し、作付けは微減である。品種は「りんか」「桃太郎」である。佐賀産の「光樹トマト」は平年並みの出荷となっており、5月に入り若干ピークがあるものの例年のようなピークは無く、平準的な出荷が6月20日頃まで続き、その後は減少して7月にはかなり少なくなると予想される。M・Sサイズ中心に4キログラム箱で出荷される見込みである。熊本産は微増傾向で推移し、5月の連休がピークで6月20日までの出荷となり、6月としては前年並みが予想される。

ミニトマトは、北海道産は生育が7～10日の遅れとなっており、6月下旬から出荷開始し、8月のお盆前頃がピークと見込まれる。従来を中心品種「キャロルセブン」に加え、今年から新たに「キャロルポポ」が加わった。青森産は、大玉トマトと同様6月20日頃から出荷開始すると予想され、作付けは微減である。品種は、「サンチェリーピュア」である。

ピーマンは、岩手産は、3月の温暖な天候により苗の生育が早まった。ハウス物は4月初めに定植したが、4月の多雨傾向や低温により生育は緩慢となった。選果の開始は5月20日からと予想され、個選物は5月10日頃から地元へ出荷され、東京市場へは6月初旬からと見込まれる。主力の露地物は6月10日頃から出荷が開始し、最大のピークは7月末から8月のお盆前と予想される。高知産は、3～4月の天候が安定し、4月に出荷のピークを迎えた。5月は成り疲れからやや減少して推移し、5月下旬から6月上旬に再び増える予想される。6月中旬には減り始め、7月上旬には東京市場への出荷を終える見込みである。

土物類



ばれいしょは、静岡産は、「男爵」のハウス物は例年並みの5月20日前後から出荷が始まるが、多数を占める露地物が遅れている。天候はやや干ばつ傾向で、低温で推移したため他産地と同様にやや小ぶりの仕上がりが予想される。6月は安定して出荷され、ピークは7月上旬になると見通される。「メークイン」は6月

18日頃から共選が始まり、東京市場へは6月20日頃から出荷が開始し、ピークは7月中下旬となる見込みである。今年度産について種いもの状況から判断すると、やや不作になると予想される。降雹被害もあり、小玉傾向の可能性もある。千葉産のメークインは例年と同じ6月20日頃から出荷が開始し、7月いっぱい出荷されると見通される。天候は平年並みであるものの、農家の高齢化により作付けは前年の90%程度と減少が見込まれる。

たまねぎは、佐賀産は5月初旬時点で早生物の出荷のピークとなっており、年間を通して一番多い。6月には田植えの作業が繁忙となるためやや減るが、中生・晩生の収穫は続き、7月には貯蔵物の出荷となることが予想される。サイズは平年並みである。兵庫産は早生物の出荷が始まっているものの、やや遅れている。6月に入り収穫のピークとなるが出荷は伸びず、7月が出荷のピークとなると見込まれる。5月の早生物については、若干小ぶりの仕上がりとなっているもののLサイズ中心であり、病気の発生もなく、品質は良好である。香川産は早生物が主体であるが、生育が遅れており、5月初旬時点までの出荷物のサイズは2LとLが半々となっており、例年より1階級小さい。早生物は5月中旬までで、その後は中生・晩生となるが吊り玉はなく、出荷は7月20日までと見込まれる。千葉産は、例年並みの4月20日から開始したが、前年より7日遅かった。5月の連休明けにピークを迎え、6月15日頃には切り上がると予想される。Lサイズ中心と例年よりもやや小ぶりの仕上がりである。

その他



ブロッコリーは、青森産は3月末から4月にかけての天候不順により定植が遅れ、平年より遅れた6月初旬から出荷が始まる見込みで、6月20日から7月中旬の前半までがピークと予想される。作付けは前年比90%と減少しており、これは畑が水田に戻されたことによるものである。熊本産の春ブロッコリーは、6月15～20日の間に切り上がる見込みである。病気が多く出荷量が少なかった前年を上回ると予想

される。

かぼちゃは、神奈川産はトンネル栽培であり、4月下旬の段階では定植が終わるところで、例年と同様に6月に入ってからのお荷が見込まれる。作付けは前年並みである。茨城産は、5月20日過ぎからハウス物が始まり、12尺トンネル物が本格化する6月中旬がピークとなる見込みである。5月初旬時点で生育は1～2日遅れているものの、ほぼ平年並みである。作付面積は下げ止まり、前年並みとなっている。品種は「くり将軍」である。

ごぼうは、熊本産は出荷のピークに入っており、5月の連休明けまで続き、6月に徐々に減少して下旬に切り上がると予想される。それでも生育が一週間程遅れており、6月としては不作だった前年を上回る見込みである。部会の生産者数は減少しているものの、一戸当たりの面積が広がっているため出荷量が減少することはない。

かぶは、青森産は気温が低めであるため7日程度遅れており、出荷開始は早くて5月20日前後からと予想される。6～7月にピークはなく平準的に出荷されると見込まれる。作付けはほぼ前年並みである。

アスパラガスは、福島産のハウス物は4月下旬が出荷のピークとなり、5月の初旬頃には減少し始める。その後露地物が始まり、5月15～25日がピークとなり、6～7月は一定のペースで出荷が続き、10月までとなる見込みである。栃木産はハウス物であり、例年は4月末頃にピークとなるが、今年は低温により仕上がりが細く、出荷量は例年の60%程度と少ない。この後6月の出荷はなく、7月に入り立茎物(夏芽)となる。秋田産は、今年の半促成物は遅れており、東京市場では4月30日から始まり、6月10日までとなる見込みである。作柄は前年ほど悪くないと予想される。北海道産は、5月初旬時点ではハウス物の出荷となっており、露地物は5月中旬頃からと予想される。今年は雪解けが遅れ、4月も天候不順が続き遅れているため、始まると急増といった展開も予想され

るものの、出荷は6月いっぱいまで立茎物の出荷はない。佐賀産の立茎物は5月下旬から始まり、10月中旬頃までと見込まれる。春芽はかなり少なくなっており、例年より少なかった。立茎物もやめる生産者がいるため、例年を下回る出荷が予想される。

スイートコーンは、埼玉産は例年と同じ6月1日からの販売が計画され、早まっても2～3日程度であろう。出荷のピークは6月中下旬となり、7月中旬にはかなり減少すると見込まれる。作付けは前年並みで、品種は「味来」を中心に「ドルチェドリーム」もある。茨城産は5月初旬時点で定植中であるが、作付計画は前年並みである。生育は天候にもよるが、ハウス物は例年通りであれば5月末から、露地物は6月中下旬からの出荷が見込まれる。品種は、「味来」（結城市産独自ブランド名「夏祭り」）、「ゴールドラッシュ」などである。

えだまめは、千葉産は例年4月20日過ぎから出荷を開始するが、5月初旬時点で7日程度遅れている。トンネル物は5月の大型連休明けからピークとなり、露地物は6月中旬頃には揃ってくると予想される。今年度産は、種子不足から例年よりも少なめの出荷が予想される。埼玉産のハウス物は始まっており、露地物が始まるのは5月20日頃からとなり、出荷のピークは6・7月と見込まれ、作付面積は前年並みである。群馬産は、適度の降雨もあり生育は順調で、6月の初旬から極早生物が始まる見込みである。今後気温が上がり、7～8月をピークに10月中旬まで継続的に出荷されると見込まれる。

さやいんげんは、福島産のハウス物は5月末頃から出荷を開始し、露地物は5月中旬に定植され出荷は7月上旬から始まり、ピークは7月中旬となる見込みである。福島産のきぬさやえんどうは5月20日～6月20日の出荷見込みであり、実えんどう（グリーンピース）は6月15日から6月いっぱい、スナップエンドウは5月末から6月いっぱいとなる見込みである。朝晩の冷えこみだけでなく、日によって寒さや暑さといった激しい気温差がダメージを与えて

葉に力がなく、遅れ気味となっている。

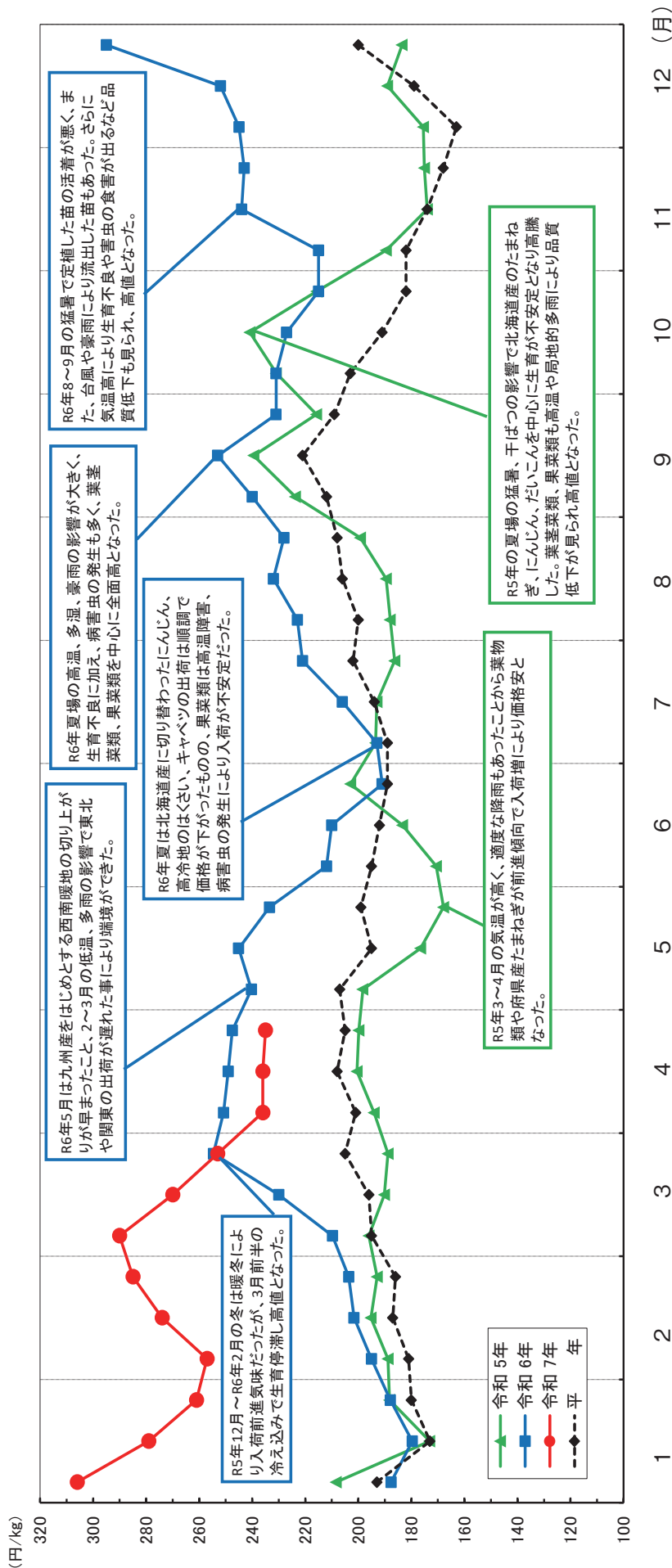
にんにくは、香川産は4月15日から出荷を開始し、乾燥物は5月の大型連休明けからとなり、ピークは5月中旬で、6月には減少傾向で推移し7月20日までの出荷と見込まれる。出荷量は前年並みと予想している。

すいかは、鳥取産のハウス物の東京市場への出荷が、ほぼ例年並みの6月5日から始まる。7月10日までは出荷が多いが、その後はやや減少傾向で推移し、7月いっぱいで見込まれる。品種は、前年と同じ「祭ばやし」系が中心であるが、後半は「羅^ら皇^{おう}」系が多くなると見込まれる。千葉産のハウス物の開始は5月12日で、ピークは5月最終週から6月初め頃までと見込まれる。5月18日の週は交配時の天候不順からいったん減少が予想される。気温の変化が大きく、一部で花飛びしていることが気かりではあるものの、その後の6月のトンネル物は順調に出荷されると予想される。

（執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一）

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)

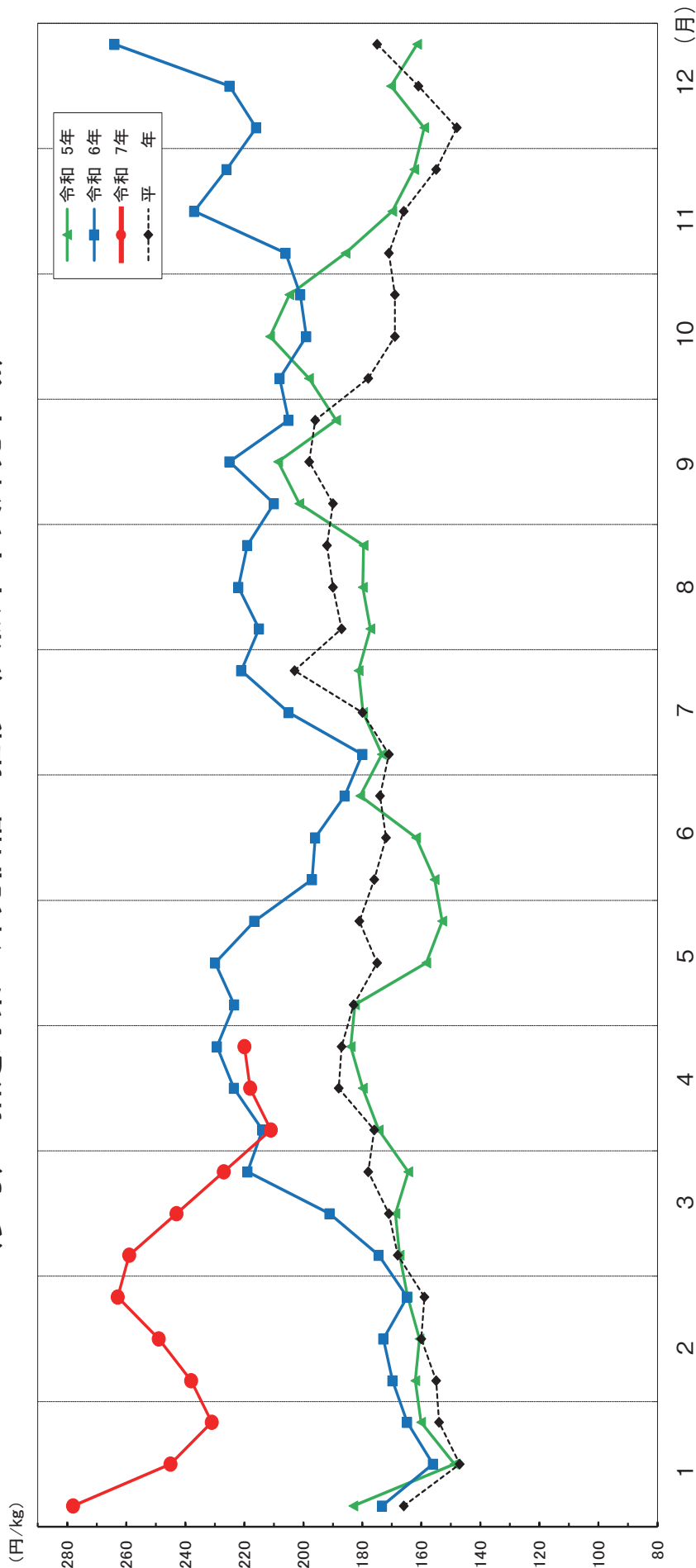


(単位：円/kg)

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬			
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295
令和7年	306	279	261	257	274	285	290	270	253	236	236	235																								
平 年	193	173	180	181	187	186	195	196	205	201	208	205	207	195	199	195	192	189	189	194	202	200	206	208	212	221	209	203	191	182	182	174	168	163	179	200

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年とは、過去5力年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。
注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、定橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位: 円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬										
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264
令和7年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220																								
平	166	147	154	155	160	159	168	171	178	176	188	187	183	175	181	176	172	174	171	180	203	187	190	192	190	198	196	178	169	169	171	166	155	148	161	175

資料: 農林水産省「青果物卸売市場調査」

注 1: 平年とは、過去 5 力年 (令和 2 年 ~ 6 年) の旬別価格の平均値である。

注 2: 大阪本場及び大阪東部市場のデータである。